

---

# 異世界のBADGUY

鬼の子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界のBADGUY

### 【Nコード】

N0887M

### 【作者名】

鬼の子

### 【あらすじ】

生まれつき人相が悪く、孤児だった津海康也は銀行強盗を企てる。しかし、偶然が重なって運が悪く立てこもりした際に異世界への行き方が書かれた本を見つけ試しにやってしまう。異世界に行った先には魔王たちと勇者たちが戦う世界だった。ひよんなことで魔王側についてしまった津海は人間である勇者たちの戦争に巻き込まれてしまった。

まあそんな感じ。

## プロローグ BADGUY

「容疑者津海康也つかいこうやは現在、一件の民家に立てこもり中。現在も警察との交渉が続いています」

テレビのニュースからはキャスターの実況が聞こえてくる。

「君は完全に包囲されている。武器をおとなしく置き今すぐ投降しなさい」

外ではメガホンでしゃべっている警察のおっさん。

「リリリリリリンー」

たぶん、その警察からだろう。家の電話は鳴り響いている。

俺はそれらを聞きながらソファアにタダ呆然と座っていた。

「どうしてこうなった？」

考えてみたが、なんと運の悪い偶然が重なってしまっただけのことだ。

俺は孤児だった。元々今、俺がいる家に住んでいたジジイが身寄りの無い奴らの為に孤児院として開け放していた。

全員に里親が見つかる中、俺だけが残っちまった。まあ別に理由は分かる、俺は男だし、子供の頃からのこの目つきの悪さは尋常じゃない。この人相のことだ、カタギじゃねえ奴らの捨て子なんだろう。

ジジイは最後まで俺を面倒見て、くたばっちまった。清々した、やっと口うるせえ奴から開放されたと思った。俺に残ったのはこのただ広え家と雀の涙ほどの財産。

別になんてことねえ、このままバイトしてそれで終わるはずだった。

しかし世の中は上手くはいかねえ。この目つきの悪い人相のお陰で接客はできない。

力仕事なんぞ、する気も起きない。

ただ飯を万引きして、人の財布を盗むことでしか俺に仕事はなかった。

が、それも続くはずはねえ。お咎めくらって、そのままムシヨ行き。ますます俺に仕事は無くなった。

そんなときに出所してすぐ思いついたのが銀行強盗だ。別に捕まっただって、その間にどこか金を隠してしまえばこっちのものだ。警察には全て海に投げ捨てたとシラを切れば上手く行くだろうと思っていた。

狙った場所は近くの銀行。そこそこの人が居るが、時間帯によっては人も少ない時間帯がある。

そこを狙えば捕まりにくい。そう確信し、俺は大きめの鞆とおもちやの銃、そして念のためのナイフを持ち銀行へと向かった。

「〱〱番でお待ちのお客様、3番の窓口まで」

銀行に入った俺は人がほとんどいなくなるまで銀行窓口前のイスで待った。

「〜〜番でお待ちのお客様、1番窓口までどうぞ」

男が立って1番窓口まで向かう。

確認していて、あれが間違いなく今数えられている最後の客だろう。俺はすぐに受付の順番待ちの紙を取る。

「〜〜番でお待ちのお客様、2番窓口まで」

俺の持っていた紙の番号が呼ばれ少し呼吸を整え、窓口まで向かう。

「本日のご用件は……」

俺は鞆の前に出し、後ろのポケットに入っていた銃に手をかける。

「この鞆に」

俺は受付の女性に言おうとした瞬間。

「この鞆に一杯の金を詰めろや!!」

俺の隣の1番窓口、先程最後と確認した男だった。俺があとに続こうとした言葉と同じことを言う。銀行全体も一瞬シーンツと静まり返ったが、状況を理解したのか女性の職員が「キヤー」と悲鳴を上げた。

「静かにしろ！ この銃が見えねえのか！」

男の手には自分と同じような銃を持っている。銀行にいた警備員もたぶん偽者だろうと近寄り男を取り押さえようとする。

「バンツ」

静かに火薬が破裂した音が聞こえた。その瞬間、警備員は床に血を大量に出しながら倒れていた。

『撃った？』

この男がなぜ本物の銃を持っているかとかはどうでもいい。俺はなぜこの男が躊躇も無く人に対して簡単に撃てたことに驚いていた。

「こうなりたくなきゃ、騒ぐんじゃね！」

男は銃を振り回しながら吼えている。そしてついには俺の方へと銃口を向けた。

「てめえ何持つてる！？」

ポケットに手を突っ込んだまま固まっていた俺に男は興味を持ったようだった。

「さっさと出せ！」

男に言われるがままに、ポケットから手にかけていたおもちゃの銃を取り出した。

「てめえ、警察か！？」

ますます怪しんだ男は銃をこちらに構えながら自分の持っていたおもちゃを近づき調べた。

「なんでえ、おもちゃか。とすると、お前も俺と同じお仲間だな？」

男はバカにしたようにへへッと笑った。

「どうだ今手を組めば、少し分け前をやるぜ」

『仲間……！？』

俺の耳にはその『仲間』という単語以外聞いていなかった。人を躊躇なく撃てたような奴に『仲間』とあたかも自分と同じような存在にされたことになぜか無性に腹が立った。

この距離で、男は油断しきっている。ならば一撃で決められると分かった。俺はもう片方のポケットに入っていたナイフを取り出す。「うあああああああ！」

そのナイフを声を上げて男の胸へと突き刺した。

「て、てめえ……」

時が静かに流れるように男は俺にもたれながら、息絶えていった。

「キヤアー！」

その出来事に銀行内はパニックになる。ハッと我に返った時はすでに遅い。俺はすぐにその場から逃げようとした。

「銀行強盗の仲間が逃げるぞ！」

銀行にいた客から俺に向かってそう叫んでいる声が聞こえた。その瞬間、サイレンが鳴り響く。

俺の受付にいた女がデスク下にあるだろう非常ボタンを押していたようだ。

「早く逮捕される、この人殺し」

女は俺に睨み付け冷たく言い放つ。

俺は男の持っていた銃を奪い取って、他に何も持たぬまま逃走。

そして、このジジイの家に逃げてきたわけだ。

計画はたまたま居合わせた銀行強盗によって台無し。目撃者も多数。「強盗未遂に銃器所持違反、そして殺人罪……こりゃ無期懲役かな」

なら罪を少しでも軽くする為ならここで外に出て行くべきだろう。

俺はソファから立ち上がった。すると、テーブルにあの男から奪った銃に目がいく。

「……いつそこで死ぬか」

弾を確認する為にマガジンを確かめる。

「15発もあるのか」

俺は頭に銃を当て眼を閉じた。

「ジジイ、もうすぐ会えるからな」

そうつぶやいて、引き金を引こうとした時

「ドンッ」

ハッと条件反射で銃を構えた。どうやら元々ジジイの部屋だった方向から何かの音が聞こえたようだ。

「まさか乗り込んできたか？」

どうせ死ぬなら警察の一人でも道連れにしてやる。黒い感情が俺の中で駆け巡る。

静かにジジイの部屋の扉を開け中を確認する。

「……誰もいない？」

ジジイの部屋の窓は割れにくい針金入りの窓だ。しかし、割れた形跡もない。

周辺を探ってみると本棚から分厚い本が落ちたようだった。

「重さで落ちただけか」

その本を拾い上げ、何の本かを確認する。

「異世界への行き方？ 著者は大空……わかんねえ」

中学までしか行ってない俺には難しい字は苦手だった。

「じじい、オカルトまがいの本なんか読んで、とうとうイカれちま  
つてたのか？」

中を確認すると、なにやらの儀式が書かれたこと。異世界のことな  
どが書かれている。

今思えば俺はバカなことをしていたのか、それでも気でも触れてい  
たのだろうか。

あるうことか、その本に書かれていた儀式の内容をこと細かく再現  
しようとしていた。

必要なものは黒のインクやロウソクなどはこの部屋を見渡せば、簡  
単に見つけることもできた。

もしかしたら、じじいも試していたのだろうか。床一面に魔方陣のよ  
うな紋章を黒インクで描き、火を付けたロウソクを四方に置く。

「……最後は自分の血を中心に一滴落とせば完成する」

俺はナイフの刃部分を左手で握った。まるでそれが誰かに操られる  
かのような感覚であったが、その瞬間おかしいことをしていること  
にやっと気付いた。

「たくつ何やってんだ俺は」  
すぐにその儀式をやめようとナイフをしまおうとしたが。

「ガシャーンッ!」

玄関の方からガラスが割られたような音が聞こえた。間違いなく警察が強行突破で踏み込んできたのだろう。俺は急いで銃を持ち構えたようにしたが。

「痛てっ」

ナイフを持っていたことを忘れ、誤って指先を傷つけてしまった。左手からはポタポタと床に血が落ちていく。

「来るなら来いよ。扉開けた瞬間に撃つてやる」  
血のことは無視して扉に銃を構えた。

「ドドドドッ」

大勢の足音がこちらに向かってるのが分かる。

「来るっ!」

扉が開きそうな瞬間、足元から一杯の光が輝いた。

「な、なんだ!？」

俺はその光にまるで底なし沼に埋まっていくように落ちていった。

「津海! おとなしく銃を捨てて手を上げろ!」

警察は銃を一齐に部屋の中で構えたが、誰も居ないことに拍子抜けしていた。

「……ここにはいない。ん? なんだこれは」

警察は儀式の後に気付く。

「変な宗教にでも入ってるのか奴は。探せ！ この家の中にはずだ！」

そのことを気にも止めないで警察たちはその場から離れていった。

「う、うづ……?」

俺は気がつく、横に倒れ、芝生のようなモフモフとした感触が肌に伝わる。

「夢か？」

一瞬そう思ったが、肌を感じる風とその芝生からの草の匂いが本物だと感じさせる。

ふと先ほどナイフで怪我をした手を見ると血が流れているのは止まっていたが明らかに刃での切り傷があった。

「まさか……な」

あの本に書かれた内容が本当に実行できてしまったことに薄々感じたが、信じたくもなかった。

しかし、ここから俺の物語は始まる。

## プロローグ BAD GUY (後書き)

大空……別の小説に出てるキャラです。

たぶん伏線でもないので、期待はしないでください。

とりあえず……書けるところまで書くか。

## 1話 ジゼルとの出会い

気持ちの良い風が吹くと、草が揺られ、そこから出る草の匂いは感じたこともないのに田舎への懐かしさがこみ上げてくる。

「しかし、どうするべきか」

草むらで倒れていた俺は起き上がり、辺りを見回せば一向に見える景色は草と木ばかり。異世界というだけで人はおらず植物ばかりだけがある世界にやってきてしまったのではないかと不安を覚えてくる。

とりあえず、このままいたのでは埒が明かない。何かないかと立ち、辺りを散策してみることにした。

「……………ん？」

しばらく歩くと、ほとんどの木に大きな物体が貼り付いている場所に着いた。それらの物体を掴み取り、それを調べてみる。

「これはキノコか？」

形状を見たら、確かにキノコだが。としてもなんとというデカさだろうか。ゆうに40cmはあるかないかだ。瞬間、「グウー」と腹の虫が鳴る。そして、このキノコを見るが「ダメだダメだ」とクビを横に振った。

「どうみても毒キノコだよな……………これ」

この大きさでなんとというか、この色を言葉で表現しにくいキノコを食べる方がどうかしている。とりあえずはそのキノコを放り投げ、他に食べ物になるような物はないか確かめることにした。

「ザザッ」

突然、後ろの草むらを踏み近づくと気配がした。俺はすぐにそのキノコが生えていた木の後ろに隠れ、その正体をこっそりと確認する。

「あつたー！」

草むらから出てきて者を見て俺は拍子抜けした。出てきたそれは女の声でフードを被った人らしきものだったからだ。とりあえずは言葉が通じる第一の人を発見したので近づこうとしたその時。

「バサッ」

また別の草むらから大の男2人が剣を持って、フードを被った女を取り囲んでいた。

「な、なんですか。あなたたちは」

女は叫ぶが、男たちは「へへッ」と笑い、その内一人がしゃべり続けた。

「あんだ魔族だろう？ 悪いがこちらでも仕事でな。魔族を捕まえると懸賞金がたんまりもらえるんだよ」

「魔族？」俺の頭は不可解な言葉を聞く。まさかあのフードを被ったのが魔族だというのだろうか。

そうこうしている内に男2人は女の両腕を掴み、フードを開けさせるが その姿に先ほどの疑問はすぐに解決してしまった。

「かなりの上物だな。これは生きて連れていった方が価値があるんじゃないかねえか」

見た目は女の子だが長い銀髪に青い瞳。そして、あるうことが頭の横から2本の角が生えていた。

「よし、このまま村まで行って金もらって一杯やろうぜ」

その女の姿に少し驚いてしまったが、男たちの会話を聞くには村が

あるらしい。このまま着いて行き、まずはそこで今後のことを決めたほうがいいだろう。

別に俺はその時、彼女を助けるつもりなんて更々なかった。

こんな異世界に来て、その仕事を生業している男たちを邪魔したくない。そして相手は魔族という化け物だ。人間じゃないのなら助けなくても問題ないだろうと思っていた。男共は異形の女を連れて動こうとしていたので、それを追う為に付いていこうと足を動かすと

「バキッ」

ふと足元に落ちていた木の枝を踏んでしまったようだ。

「誰だっ！」

男たちはその音を聞き、こちらに近寄ってくる。このまま跡を付いて村とやらに行くつもりだったが、こうなっては仕方がない。面倒ごとはごめんだったが

「プランBだ」

俺は木の陰から出た。

「いや、たまたまここにいた人間だ」

手を上げて、男たちに自分は無害だと確認させる。

「なんだ、ただの人か」

男たちは剣を降ろす。この女の子には悪いが、俺も生きる為だ。このままこいつらの仲間になつて。

「おいっ」

急に1人の男が近寄り声をかけてきた。「何です？」と返事をする。瞬間にその捕まっていた女の子から「避けて！」という声が聞こえ、即座に目の前に刃を振り下ろそうとした男が見えた。

すぐに避けようとしたが「ザシュッ」と包丁でを切ったような音がした。どうやら右腕を剣先がかすっていたようで、血が出てくる。

「ちっ」

剣を持った男は俺を仕留め損なったことに舌打ちをする。

「な、なんで俺を殺そうとしたんだ!？」

なぜ俺は殺されそうになったのか。血が流れる右腕を抑えながら男に質問する。

「決まってるだろう？ お前はせっかくの俺たちの獲物を横取りしようとしたんだろ？」

もちろんその考えは始めから持ち合わせてはいない。こいつはどうやら生粋の悪党らしい。人を殺すことに抵抗も何もない腐った奴らだ。

「ほらよ、じゃあ死ね」

また男は剣を構え、こちらに突っ込もうとした。この至近距離ではどうにか避けてもまた次の攻撃が来るだろう。

俺はポケットに持っていたある物を取り出す。

「待て！」

ポケットを取り出した物はその時持っていた銃だった。男にそれを向け、制止しようとする。男もピタッと止まるが、その物に何か不思議そうな顔をしていた。

「ん？ なんだそりゃ。そんなものでどうにかできると思ってるのかよ」

こいつは銃を見たことがない？ いや、もしかしたらこの世界に銃というものは存在しないのか？

「……」

集中して、銃口を男の額に狙いをつける。

「今度こそ、じゃあな！」

剣を振ろうとした瞬間 俺は引き金を引いた。

「バンッ！」

「ドサツ」と男はそのままに仰向けに倒れた。

仲間の男が「何だ何だ？」と女の子を掴みながら倒れた男を足で確認し、様子を見るが額には血が出ていて、明らかにその眼には生気が無かった。

「……………死んでやがる」

間違いなく即死だろう。男は一体何が起きたのか、分からないけど、俺を睨む。

「てめえ！ よくも兄弟を！」

男は怒り狂い、女の子を突き放してこちらに剣を振ろうとしていた。

俺は先程と同じように男の頭を狙いつけ、引き金を引いた。

「バンッ」

硝煙臭い銃をポケットに入れ、二つの死体を木の下に場所を移動しておいた。

「あのう……………」

先程の角が生えた女の子が俺のことをジッと見ている。

「先程は助けていただいてありがとうございます！」

女の子はペコリと頭を下げるが、俺は助けたつもりなんてものはない。

「俺は自分の身を守っただけだ」

「いえ、それでも。本当にありがとございます」

そこまで言うのなら何かお礼がもらえるかもしれない。とりあえず情報と寝床だ……。

「はい、分かりました」

「!？」

俺はまだ言ってもいないのに、彼女は分かったように返事をする。

「あ、その前に」

先程キノコが生えていた木に近寄り、キノコを取った。

「これを探してたんですよ。これさえあれば万病の薬を作れるんで」

思いつきり糞り取るのが慣れてる辺り、そのキノコは普通に食べられるのだろうか。

「ああ生はダメですよ。乾燥させて粉末にしないと」

「おい、まさか君って」

やはりさつきから俺の心の声が聞こえているらしい。

そして、先ほど彼女は男が自分を襲いかかるうとした時に避けてと言った。

「ええ、その通りです。私の魔族としての能力、相手の目を見た者の心が分かるのです」

なんというか、便利な能力だなあとか、という感想より、あまりにも子供が考えたようなものに少し啞然としてしまった。たださえ、

その頭の角が本物かどうかさえも怪しいのに。

「私の名前はジゼル」エイベラート。ジゼルって呼んでくださいね」  
成り行きで歩きがてらに自己紹介をすることにした俺は彼女の名前がジゼルということは分かる。

「俺は……康也だ」

「コウヤさん？」

ジゼルの言葉に少しムツとする。小学生のときに何かそのように呼ばれて以来、「高野山」に似ているからマウンテンというあだ名が付けられたので、どうも嫌な思い出しかない。

「そういうと山の名前みたいになるから普通にコウヤって呼んでくれ」

「は、はい。分かりました」

少し考えていることを読まれてしまったのだろうか、自分のそのくだらない理由に少しジゼルは戸惑っていた。

しばらく草むらを十分進むと、隠れたように何かの人がぎりぎり入るくらいの洞窟ががぽっかり空いていた。

「この中に入りますから」

と、ジゼルは先に飛び込むように進んでいった。

「ちょ、おい!？」

その行動に信じられなくなったが、仕方がない。俺も意を決して穴の中に飛び込むことにする。

「……ウソだろうか？」

穴から落ちた先は暗雲の空に崖の上に立つ黒色の古城だった。

「闇ダークパレスの城にようこそ」

少女はこちらを向いてニコリと笑った。

1話 ジゼルとの出会い（後書き）

遅れまして申し訳ない。

## 2話 闇の者たち

薄気味悪い黒い霧がモヤモヤと城を包んでいる。

ジゼルが先導し、城に近づいていくと闇の城への門が見えてきた。なんて立派な門だろうか。門の柱の両側には羽の生えた怪物の石像が立っている。

しかし、よく見ると門には立派な錠前で閉ざされているようだ。周りも見ても城に入るにはここぐらいで、あとは柵で囲まれている。

「ここでちょっと待っててください、コウヤ」

言われた通り待つことにする。たぶん門の鍵を開けるかなんかだろう。

「ジゼルです。ただいま帰りました」

ジゼルは門に向かって独り言のように言っていた。

「ちよ、おいおい。大丈夫か？」

その行動に少々頭の様子を疑ったが。

「シギヤアア」

あるうことか門の柱にいた怪物の石像が鳴き声を上げ動き出している。

そしてパタパタと飛び、門の錠前までいくと胸にぶらさげていた鍵を使い門を開けた。

「……セキュリティはしっかりしてるみたいだな」

確かにこれなら関係者以外は通ることができないわけだ。

「門番のガーゴイル君は知らない人が来ると危険ですから危険……ね。あまり想像したくはないが。」

門を通った俺の先にはついに闇の城のドア前でたどり着いた。

「そうそう、私の家族は見た目は怖いですが根は優しい人たちので大丈夫ですから」

見た目？ ジゼルを見た感じではまだ怖いという気持ちにはなれないが。そう言った後ジゼルがドアを開け中に俺を入れさせる。

中に入ると中央に大階段は確認できたが、それ以外の回りは暗い。

照明もロウソクが何本か置いてあるだけで目が馴れてくるまではそこを動くことはできなかった。

「ん？」

気のせいか、何かパタパタという音と手に風の感触を感じた。気のせいだろうか、何かいるのだろうか？

「ジゼルです。ただいま帰りました」

ジゼルが何も無いと思った場所に話しかけるように見えた。

すると急に

「姫様ー！」

羽をパタパタとしながら頭には角、口には牙がある生物が叫びながらジゼルの胸へと飛び込んできた。

「化け物!？」

とつさに銃を構えてしまったがジゼルに「待ってください」と止められてしまった。

「インプ君は私の友達です。言ったでしょう、根はいい人だって」

インプとかいう生物が服に胸を掴みながら、こちらに目を合わせた。その表情ははじめはキョトンとしていたがどんと恐怖への顔と なっていく。

「に、人間がきたぞお！」

インプは城中に響き渡る声をあげる。その声のあとに大勢の近づく 「ザザツ」という足音が聞こえてきた。

「ジゼル、何かまずそうじゃないか？」

俺がジゼルに不安そうにいうと「大丈夫です」と根拠もないような 返事をした。

「おいおい大丈夫かよ」

段々と目も馴れていき、入り口から左右にも通路があることが確認 できたが……明らかに多くの影がこちらに寄ってくるのが分かる。

チラツとロウソクの光で確認できたのはガイコツの顔が浮かびあが ってきた。そしてついにワラワラとガイコツに一つ目の男、下半身 が蛇のような女と明らかに人ではないものが俺らの周りを囲んだ。

「か、帰るか」

ドアを開け戻ろうとした先「バシュツ」とドアノブのところに矢が いつの間にか刺さっていた。

「ジゼル……もしかして騙したな？」

恐らく俺を取って捕まえて食おうという魂胆だが、俺もここでただ やられるわけじゃないって。

「誰ですか、弓矢を射ったのは！ 城の中ではやらないって言った でしょ！」

なぜか先程の行動に怒っているようだ。そして一人の弓矢を持った ガイコツが出てくるとジゼルに頭を下げる。

「ごめんなさい姫様。だってその人間が帰ろうとしたから……」  
カタカタとガイコツは口を揺らしながら喋るが、ジゼルまだ怒って

いるようだ。

「みんな大丈夫です。この人は私の命の恩人で私が客として招きました。みなさんもこの人に失礼のないように」

ジゼルがそう諭すが明らかにそこにいる奴らの目は殺気で満ちている。

「あんまりみんな分かってないみたいだぞ？」

しかしジゼルは「大丈夫ですよ、根はいい人たちですから」と答えた。

化け物共は前の階段に行く道を開け、俺らを先に進ませようとしたがピリツと電撃みたいなものが俺の脳を走った。周りを見ると化け物共も緊張したかのような顔をしている。

コツコツと階段から異様な気配を発したものが近づいてくるのが分かる。階段を降りる一步一步が俺の心臓にドクンツと鼓動を鳴らしていた。

「もうお帰りでしたか……お父様？」

ついに最後の段を降りてきたのは長身にジゼルと同じロングヘアの銀髪、頭には立派な2本の角が左右に生えた男だった。

「やれやれ、また問題を持ち込んでくれたなジゼル」

男はため息をつく、今までジゼルにしがみついていたインプという物がバツと飛び出す。

「偉大なる我らの魔王バゼル様！ 万歳！」

「万歳！ 万歳！」

周りにいた化け物共はその男に向かって万歳をする。

「静まれ」静かに男が言うと万歳の声は一斉に止まった。

「……客人よ。相手が何であろうと私は歓迎する。ジゼル、客人を

部屋によこせ」

男はふつと振り返り、また階段を上っていった。しかし、俺に対しての男の顔は他の奴らと同じ殺気立っていた。たぶん俺は招かれざる客ということなんだろう。

「行きましよう、コウヤ」

ジゼルに案内され階段を上り、大きな通路へと出た。

「このまままっすぐ行った先がお父様のお部屋です。詳しいことはそこでお話しましよう」

外観から見ても雰囲気は想像できたが、まさかこれほどまでとは思わなかった。通路の並びには斧や槍を持った甲冑が並び不気味な演出に拍車がかかっている。

「しかし、すごいなこれは」

その中の一体に軽く手を振ろうとすると「あつ、いけない」ジゼルが止めようとした。

「えっ？」

甲冑がいきなり動き出して持っていた斧をいきなりドスン振り落とした。間一髪少し動いたことで斧からは数センチの所に落ちている。「チッ！」

甲冑から舌打ちした声が聞こえ甲冑は何事もなかったように元の位置へと戻った。

「すいません、ゴースト君です。あの子はなかなか言うことを聞きませんので」

「ゴ、ゴースト？」

ゴースト、つまりは幽霊だということか。まったく怪物に幽霊までとは何でもありな所に来てしまったようだ。

「先に進みましょう」

暗く長い通路を抜けた先には大きなドアがある。ジゼルがドアを開けようとした瞬間ピタッと止まった。

「……お父様め。コウヤ、ちょっと私を並ぶようにして後ろにいて

ください」

「？」何を言っているのか分からなかったがジゼルの言われた通りにし、ジゼルはドアを開けた。

「カシヤツ！」

中には多くのガイコツが剣を持ち、こちらに一斉に構える。

そして真正面奥にはあの男、バゼルが豪華なイスに足を組みながら座っていた。

「すまん人間」

ニヤツと笑いバゼルは手を上げた。

## 2話 闇の者たち（後書き）

なんか魔王が厨二病に出てくる奴みたい。

### 3話 闇の城での鬼(じつじ)

「お父様……」

ジゼルが少し悲しそう表情をしたが、半ば分かっていたような口調で言う。

部屋の中には大勢のガイコツが剣をこちらに向けていた。魔王バゼルが「すまないな」と言ったあたり、つまり俺を殺すつもりでいるのだろう。

「いくら娘の頼みでもな、ここにいる部下たちは納得してもらえないのだよ」

バゼルがそんなことを言っているが、たぶん嘘だ。こいつが一番納得していないのではないかと思った。

さてこのままでは俺は捕らえられて即刻首を取られるという立場だろう。しかし、ここを切り抜けるにはどうしたらいいのか？ そんなことを考えている内に「コウヤ、ちょっと」とジゼルがコソッと話しかけてきた。

「今から私の作戦を……」

作戦……なんでもいい、この状況を打破できるならジゼルの言ったことに従おう。

「実はですね……」

話を聞くと、あのいかにもな魔王がそんなことをするとは思えないものだった。だが確かにそのことを武器にするしかないだろう。

さて作戦も整った、まずは第一段階だ。

「全員動くな！」

俺はジエルを後ろから絞め、頭に銃を突きつけた。

「な、なんだ？」

ガイコツたちは銃というものを見たことがないらしく、何をやるう  
としているのか理解できないらしい。

「怪しげな道具だな。だが人間、ジエルも魔族、大抵のことでは死  
なんぞ？」

確かに銃を見たことない連中にとって威力を知らないだろう。残り  
の弾数が気になるが、ここは披露してみせなければならぬだろう。  
丁度バゼルがイスに座っている後ろの棚に花瓶のようなツボがある  
ことに気付いた。

「ジゼル、先に謝っておく」

「えっ？」ジゼルの反応をよそに銃の照準を頭から花瓶へと狙いを  
変え撃った。

「バツリーン！」

狙い通り花瓶は大きな音を立てて割れ、破片が落ちていく。その場  
にいた一同はその音に凍りつき、一体何が起こったのだろうかと思  
りを見回していた。

「……………」

バゼルも何が起きたのか、しばらく呆然と固まっていた。

「行きましょう！ コウヤ！」

その隙にジゼルは俺の手を掴み、その部屋を抜け出して廊下を全力疾走する。

「はっ、何をしているお前達！ 奴らを捕まえろ！」

やっと正気に戻ったのか、ガイコツの兵士たちも全力でこちらを追いかけてくる。俺自身の足なら追いつかれることはないが、ジゼルは少々息を切らしている。

場所もこいつしか分からないし、何かいい手はないかと考えていると先程ゴーストにもうすぐで大怪我をされそうになった甲冑の通りに差し掛かろうとした。

そのことで良い案を考えたが、いちかばちかの賭けだ。だがこの状況でならやるしかない。

「おい、ゴースト！ また来てやったぜ。俺を殺せるもんなら殺してみやがれ！」

甲冑たちがカシャカシャと音を上げて、怒りでブルブルと震えるように一斉に手を上げた。

「今だ！ 全力で走り抜けろ！」

ジゼルの手を引いて、甲冑の通りを掻い潜っていくと同時に。

「ガシャーン、ガシャーン」

甲冑の持っていた斧を順々に振り下ろしていった。

「ウ、ウワアアアア!?!」

丁度、後ろに走っていたガイコツたちはその斧に当たっていく。その様子を止まってみたが、どうやらガイコツたち全員を足止めすることに成功した。

「この間抜け共が! ゴースト! 貴様も貴様だ!」

あとから来たバゼルはその光景にあきれて怒っていたが、俺たちの姿を確認するやいなや、バゼル一人で追いかけてくる。

「ジゼル、行くぞ!」

ジゼルの手を引いて、また追いかけてこを再開した。

しばらく通路を走っていくと、ジゼルが「その右の部屋に入ってください!」と右にあるドアを指差した。急いでドアを開け、内側から「ガチャリ」と鍵を閉める。

振り返って、この部屋の中を見るとどうやら書斎のようだ。壁は棚になっていて無数の本などが詰まっている。

「ええと、確か……」

ジゼルはその本棚から何かを探し始めているようだ。

「ドンッ!」

ドアから叩き入ろうとしている音が聞こえた。

「うっっ……」

「ジゼル、まだか!?」と俺はジゼルの余計に焦らしたのか「ちょっと待って!」と少し怒り出した。

しかし、「あっ」とその直後に目的の本が見つかったようだ。

「これだった、『愛ゆえに』という本の題名」

ジゼルはその本を出そうとした途端に壁の棚が「ゴゴゴゴゴッ」と大きな振動を立て、回転しだし、棚の奥にはまた通路が繋がっていた。

「か、隠し通路ってやつか?」

「コウヤ、早く」ジゼルが先に入り、俺もそれに付いていく。

「我が内に眠りし、炎の魔人よ。今ここに力を貸し対象を業火と化せ! メテオファイヤー!」

何か恥ずかしいセリフが聞こえたと思った同時に、ドアが赤く燃え「バンツ」と吹っ飛んでいった。

「ま、魔法!?」と、その衝撃に少し腰が引けた。

「貴様! その先に行かせてなるものか!」

ドアがあつた場所にはバゼルが右手を前に出し「シュウツ」と煙を出した状態で立っていた。

隠し通路を開けてしまったことにバゼルはこちらをものすごい形相

で追いかけてくる。

「こちらに早くコウヤ！」

手を引かれ、ただ暗い通路をひたすら進んでいくと、その先にドアらしきものがる場所へと向かっていくのが分かった。

「待て！ そこを開けるな！」

後ろからバゼルの声が聞こえたが、その声を無視してドアを開けた。

「……ウワァ」

ドアを開けた先は人形、ぬいぐるみ等でいっぱいピンクの壁紙をした部屋だった。

「ガクンッ」

俺たちがその異様な光景を見ている間にバゼルを見られてしまったことがショックだったのかヒザからガクンッと地に手を付いた。

ジゼルが聞かされた作戦はこうだ、実は自分の父親は女の子みたいな趣味があるらしく、その隠し部屋があるからそこに誘導させればなんとかできるのではないかと。

「クククッ、仕方ない」

バゼルは開き直ったのか、ムクリと起き出した。

「私の秘密を知ってしまったようだな。泣いて詫びでもすれば命だ

けは助けてやろうと思ったが仕方がない……」

バゼルは顔をうつむきながら、両腕を広げる。

「できれば苦しまず逝かせてやろう……風の聖霊よ、汝我が手に宿り、その力を与えたまえ」

手にはまるで竜巻のようにグルグルと風が集まっていく。

「お父様、最強の技の一つシルフスパライルね……」

風はどんどん集まり、バゼルの両腕を前に出して重ね合わせる。

「その胸に風穴を開けてやろう！ くらえ、シルフスパイラ……」

途端にジゼルが「はいっ」とすぐそこにあつた人形をこちらに投げしてきた。反射的にそれを手に取る。

「はっ!?!」

ピタッとバゼルの動きが止まった。そしてワナワナと震えだして指を差す。

「貴様、私のアンジェリカちゃんに何をやる気だ!?!」

あ、アンジェリカちゃん？ さてはこいつこの人形にそんな名前を付けてるのか。

そして、いかにも心配そうな顔をしていたことで良いことを思いつく。俺は銃を取り出して、人形の頭に押し付けた。

「もちろん、こうするためだ」

「なんてことを!!」バゼルは悲鳴に近い声を上げた。

「とりあえず、それを静かに置け。先程までの無礼はすまなかつたから」

さっきまでの態度とは違く、あわあわと慌てだしていた。

「……なあ、ジゼル。こいつ本当にこれで魔王なのか？」

その様子に疑問を思えてくることをジゼルにぶつけたが「ええ、いちおう……たぶん」と自分と同じようなことを思っているようだ。

「頼む。この城にも居させてやるからな、な!？」

あまりの必死な態度に少しおもしろくなつたか、俺はわざと銃を構え。

「バンッ!」

と口で銃声の音の真似をした。

「バタンッ」

途端にバゼルが床に気絶しだした。

「……なんかおもしろいな、お前のお父さん」

ジゼルは少々困った顔をして、バゼルの体を持ち上げた。



3話 闇の城での鬼ごっこ(後書き)

魔王がかわいい件

#### 4話 世界の名はセルトラーズ

気絶したバゼルの肩を担いで魔王の部屋のベッドまで運び終えた俺は、ジゼルが紅茶を入れてくれるというのでテーブルでくつろいでいた。

「ん……アンジェリカちゃん!？」

バツとこのあぶない性格の魔王は急にベットから飛び起きた。

「はっ……ここは?」

バゼルは頭を抑え、頭を横に振る。

「ははは、なんだ私は夢でも見ていたの……か?」

ちらりと横に頭を向けるとテーブルでくつろいでいた俺を見て驚愕しているようだ。

「貴様! よくもアンジェリカちゃんを!」

バゼルはこちらに掴みかかろうとしたが。

「ボタンツ!」と顔面をもろに受け倒れた。

「な、なんだ?」

そりゃ、ジゼルが念のためにバゼルの身体に縄をくくりつけておいたからだ。しかし、よほどアンジェリカちゃんのことがか大切だったのか。あの気の取り乱しようは何か思い入れのあるのだろう。

「あ、起きましたかお父様」

ティーセットを持ちながら、ジゼルは部屋へと入ってくる。

「グルルルッ」

バゼルは自分の娘にまで威嚇をし始めている。獣か……こいつは。

「まったく、はいお父様」

ジゼルはティーセットの盆から何かを放り投げた。あれは間違いない、アンジェリカちゃんだ。

「おお、我が愛しのアンジェリカちゃん」

人形を頬に摺り寄せて、幸せそうな顔をしている。

「さてとコウヤ、お父様にご迷惑をお掛けいたしました」

ジゼルはティーセットをテーブルに置き、こちらに一礼をした。

「まずは……あなたはこの世界の人ではないでしょうか？ 良ければ聞かせてもらえませんか」

ジゼルがイスに座ると、ティーカップにポットからお茶を注ぎ始める。

確かに今まで見せていた銃という武器はこちらの世界にはどうやら存在しないようだ。

その代わり、こちらには現実の世界には無い力を見た。すぐその魔王がした『魔法』とかいうものだ。

「情報交換だ。確かに俺はこの世界の人間じゃない」

まずはこの世界でやっていくには情報が必要だ。俺は自分の身の内を話す代わりとして、この世界の話求めた。

「ええ、いいでしょう。あつ、お茶でも飲みながらどうぞ」

そういつて何か紫色の怪しげなお茶を勧めてきたので、とりあえずティーカップを持つだけで話し始めることにした。

俺は俺のいた世界のこと。人間しかいないということ。俺が警察に追われて立てこもった際にじじいの部屋から怪しい本を見つけてこの世界に来てしまったことを。

「人間だけの世界か……腐ってやがるな」

突然バゼルがベットに座りだし、こちらの話当真剣に聞いていた。

「俺の話は終わりだ。次はこの世界のことを教えてくれ」

「ズズツ」とジゼルは紫色のお茶を飲み、口を開いた。

「この世界の名はセルトラース。神々たちの戦争によって出来た世界と言われています」

か、神々ね……。いきなりファンタジーの世界に入ってしまったと思うと、俺の脳には付いていけなかった。しかし、これは間違いなく現実だ。それさえも受け入れるしかないのだろう。

「そして、この世界には人と魔族が住んでいました。ですが、人が突如として魔族の土地へと足を踏み入れて来たのです」

俺たちの世界でもそうだ。人は自分の欲の為に戦争をしていく。それは人の業なんだ。

「……コウヤは人なのに、ずいぶん人を嫌っているんですね」

ハッと俺は思い出した。ジゼルは確か人の心を読む力を持っていた

のだ。つまり先程から考えていたことなど全て知られていたのだ。ならば最初から自分の考えは読めていたのだろ。ならば素直にここで言っていたほうが身のためだ。

「俺は自分以外の人間しか信用はしていない。それはお前らも例外じゃない。俺は利用できるものなら何でも利用するあんたら嫌っている汚い人間と同じだ」

俺がそのことをいうと、ジゼルが「フッフ」と突然笑い出した。

「でも、あなたは私を助けてくださいました。大丈夫です、それだけであの人たちとは違います」

俺が言ったことにジゼルは否定し、もう一つの空だったティーカップにまたお茶を注ぎ始める。

「はい、お父様。マンドラゴラ茶です」

そして、そのお茶をベッドに座っていたバゼルに手渡す。

「お前の事情は分かった。では、お前は一体この世界で何が目的なんだ？ やはり元の世界に戻りたいか？ それともここで生きていきたいのか」

「俺は……」まだ考えがまとまらない。確かにこの世界でやっているのか不安があるが、もし元の世界に戻れたところで俺は警察に追われている身。ならばここで第二の人生を歩むのも悪くはない。しかし、ここに俺の居場所はあるのだろうか。

紫色のお茶に写った人相の悪い自分の顔を見て考え込んでいた。そ

の様子を見てジゼルは悪いと思ったのか話を変えることにした。

「それよりお父様。今日は近くのベルーザの町に出ていたようですが……」

そういえば初めここに来て、俺が殺した人間はその町のことを言っていたのだろうか。

「ベルーザの町は私たち魔族との拠点に近いですから、私たちを倒すことで糧を得るハンターと呼ばれている者たちが集まりやすい場所とも言われているんですよ。しかし、彼らの情報網はすごい。それを利用して人間たちの動きを察知しているのです」

ジゼルに考えていることがバレて、ベルーザの町を解説してくれた。「私は人間に化けることができる力があるからな。直接行って聞きのいくわけだ」

バゼルが説明の後付を加える。なるほど敵を利用して情報を聞きだす。こいつらは戦争をしているんだ、情報戦が何よりも必須なんだろう。

「私がお願いしているんです……」

その方法はなんとジゼルが頼んでいたようだ。こんな女の子が戦争への加担などと思うが……。

「私は……できることなら、人間との争いを回避したいのです。双方に血流れるのは嫌なのです」

この子は人を恨んではいないのだろうか。最初に会った時も人間達に連れ去られようとしていたのにも関わらず。

「こいつは甘いんだよ……」バゼルがお茶を一気に飲み干すと、ベ

ツドの横にカップを置いた。

「だが、それも言ってもらえなくなってきた。奴ら……英雄の一人が動き出した」

バゼルの言葉にジゼルは蒼白な顔をしている。そして持っていたテイクアップをガチャガチャと震えだした。

「そ、そんな……」

英雄？ 何かやばいものなのだろうか。

「英雄とはこの世界に13人もいる奴らのことだ。一人の力が数百の兵に匹敵する強さだと言われているぐらいだ。そいつらの一人がどうもこちらに向かっていると聞いた」

バゼルが言っていることにどうもピンと来ない。数百の兵に匹敵する？ にわかにその話は信じ難い。

「昔の話だ……私は英雄の一人と戦ったことがある」

そんなバゼルは俺にある話を切り出した。

「ジゼルが生まれる前のこと。この近くの場所で私は人間の軍と戦っていた。あの時、私の軍は千を越す大隊だった。人間たちはたった数百で攻めてきたが、もちろん私は数の差に勝利を確信していた。そんな時に……アイツがいたのだ」

それが……英雄の一人のことだろう。

「人間たちを追い詰め、あとは数十ぐらいの兵しかいなかった。し

かし不思議なことに敵の指揮官がいない。不審に思った私は後ろを振り返ると……いたのだ。私の仲間をなぶり殺していく人間の姿が」

そういえばバゼルが言っていた千を越す部隊がどうみても、この城にいた数と合わない気がする。多く見ても100程度だ。

「気が付いたようだ……私の軍は一人の不意打ち行動で壊滅したのだ。不意打ちとは言っても、たった一人の行動だ。人間たちはその行動にそいつを英雄と讃えた」

その英雄たちが13人もいる……。確かにジゼルが戦闘を避けたい理由もうなづける。

「だが、私は戦うしかない。仲間の無念を晴らすべく、私の仲間を殺して英雄と名乗っている奴らを野放しにしておくことはできない」

不思議だが、人間である俺はそのバゼルの言葉に共感した。殺して偉いものなどない。人を殺して正当化できるというものなら自分も何人も人を殺している。

「でも……そんなことをしていたら、いつかはお父様が死んでしまいます」

ジゼルが涙目になりながらバゼルに聞く。

「その時は……その時だ。私が死んだとしても第二、第三の魔王が現れるだろうしな」

「くくっ」と魔王はあざ笑うかのような反応を示す。こいつは死というものを恐れていないのだろう。

「さてと、そろそろ客人を部屋に案内してくれジゼル。さすがにもうお前を取って食おうとは考えんよ」

いつの間にかバゼルは俺のことを認めていてくれたようだ。ジゼルが無言でティーセットを片付け立つ。

「付いて来てください、コウヤ」

どうやら部屋に案内をしてくれるようだった。魔王の部屋から出ると、魔王がこちらに口を出す。

「あと、あの隠し部屋の話は他の仲間には内緒にしといてくれよ」  
なるほど、口止めというわけだ……。

一方、ベルーガの町

「おいおい、あいつらって間違いないよな」

一人の村人はヒソヒソと別の村人に話している。

「ああ、あの剣と斧が交差している紋章は間違いない。英雄の一人、バトルマスターだ」

重鎧を着込んだ男たちがザザツと町を歩いて行く。

その中に剣と斧を持つ男。

「まったく暗いな……。落ち付け、もうすぐで……。魔王という極上の血を味あわしてやるからな」

男は大軍を引き連れて闇の城まで目指していた。



#### 4話 世界の名はセルトラーズ（後書き）

お待たせしました。本筋の敵となる英雄の一人が登場です。

## 5話 自室

ジゼルに部屋を案内され長い長い廊下を歩いていく。

ある程度歩くと、バサバサツと羽音が近づく音が聞こえた。

「姫様ー」

変に甲高い声でジゼルのことを呼んでいたのはこの城に入ったときの小さく羽が生えた生き物。

確か名前は『インプ』とかだった気がする。インプは俺がいることに気付いたのか身震いしている。

「に、人間！ まだいたのか！」

ごもつともだ。俺だってこんな薄気味悪いところを早く出たいんだが。

「薄気味悪いところで悪かったですね」

と、ジゼルはジッーとこちらを睨み付ける。そういえばこいつは人の考えが読めるのだった、なるべく考え事も気をつけなければならぬ。

「みんなにもコウヤを紹介しなくてはならないけど、今日はちょっと無理ですよね」

ジゼルはインプを掴みながら歩いた。

確かに今日は色々ありすぎだ。異次元に飛ばされ、斧を持った人間

に襲われ、人形趣味な魔王に襲われ……ロクなことじゃないな。だがあまり悪い気はしない。良い退屈しのぎにはなった。

「そう思っていただけだと安心です」

ジゼルがニコつとこちらを見て微笑んだ。その笑顔に少々ドキツとしたが、その考えは読まれないようにしよう。

丁度、部屋の扉の前に着くとジゼルが止まる。そしてポケットから鍵を取り出して、それを渡してきた。

何やら不思議な形の鍵だ。まるでガイコツのようなものが付いている。

「その鍵はいちおう貴重なものなので1本しかないんです……。もし複製を作ろうとする場合は人間の……」

ジゼルが少しうつむいて話したが、もういい。だいたい分かったから。

「キヒヒヒ、その時はこの人間の頭蓋骨を……」

インプが続けて言おうとしたが、頭を強く掴かむと「ギャアアア」と赤子のように泣き叫び、その場から逃げていった。

「とりあえず無くさないようにするさ。部屋の案内ありがとな」

先ほどの鍵を使って扉を開けると、中にはこれまた現代の俺にいた部屋とは比べ物にならない豪華の部屋だった。俗に言うヨーロピアンスタイルというのだろうか？ まあ実際そんな部屋に泊まったことはないので分からないが。

とりあえず暗いのでジゼルは部屋にある燭台に火を付け、扉へと戻った。

「気に入ったいただけようで結構です。今パンと食事をお持ちいたしますね」

ジゼルはペコリと頭を下げ、扉をバタンツと閉めた。久々というわけでもないのに一人の空間に束の間肩の力が抜ける。洋風なベッドに腰を下ろし、腰に入れていた銃を取り出す。

「……結構つかっちまったな」

マガジンを抜き、残弾の確認をする。1、2、3……13発残っていた。

「13ね……」ため息をしながら、その数に何か聞き覚えがある。

「13人の英雄か」

丁度その数と同じという偶然に驚いた。本来13というのは不吉な数字だが、この俺にその数はまさにぴったりという感じが出てくる。

弾をマガジンに丁寧に入れ直し、銃身へと「カチャ」と差す。

いちおう暴発を防ぐためにセーフティーをかけ、扉に狙いを定めた。

「とんでもない世界に来ちゃったが……まあ悪くない」

腐った現実世界から離れて新しい世界でのスタート。もはや俺に帰るなどという考えはなかった。

「バンツ」と言葉を発して構えていた銃を撃ったふりをした途端に

そこで扉が開いた。

「ヒュイツ!？」

そこには変な叫び声を上げて、ペタンと床に座り持っていたパンをボロボロと落としていたジゼルがいた。

「び、びっくりしました……撃たれたかと」

どうやら扉越しに俺の考えを読んで、俺が発砲したのかと思ったのだろう。まったく心が聞こえるということは厄介なこともあるものだ。俺はジゼルの手をつかんで起こし、落ちているパンを拾い上げホコリを振り払って口に入れた。

「すまん、ジゼル」

俺は素直にあやまるとジゼルは「いえいえっ!」と手を振った。

「私が悪いんですよ、また勝手に心の声を聞こうとしたんですから。私の悪い癖です……これでみんなに嫌われてしまったこともあるというのに」

確かにその人の心を聞くということは嫌がる人は多いだろう。しかし、それは表の顔が良い奴が裏の顔が汚いということを知られたくないだけの奴で、俺みたいな悪い奴と開き直っているものにとっては汚い考えがバレたところで痛くもかゆくもない。

「コウヤはおもしろい人ですね」

「そうか?」と、こいつは言ってるそばから人の心を読むことには

イラストとくるが。

「パンを落としてしまったでごめんなさい。本当はもっと良いものが持って来ればよかったのですが」

別にそのことにはぜんぜん腹も立たない。見たところ、ここらで農作を育てることは不可能だと思っし、ジゼルやバゼルが人間に紛れて食べ物を買っているのだろう。しかもここにいる魔物たち全員分の。

それを考えれば、落としてしまったパンを食べるぐらいわけもない。現代でも飯が食える日はなかったこともあつたし、消費期限切れの弁当を食べるよりかはまだ全然イケるものだ。

「さて、お話もこのぐらいにして。そろそろお眠りになつてはいかがですか、実はもう結構な時間なんですよ？」

窓の外をチラツと見てみるが、別に来た時とは変わらない。暗雲の空が広がっているだけだ。

それに気付いたジゼルは持っていた懐中時計をこちらに見せると、短い針は11時を差していた。

「まあ俺の活動時間はここらなんだが、そうだな。とりあえず今日は寝る」

とりあえず色々なことで疲れた。明日からもこのような生活が続くかと思うと、少々ため息が付きそうになるが、まあ警察からの逃亡生活に比べると安心して眠れるというのは大きい。

「はい、おやすみなさい」

ジゼルは燭台の火を消して部屋から出ていった。

「久々に安心して眠れるな」

ベッドに仰向けになり、天井を見ながらボソリとつぶやく。

こう安心して眠れるのはいつ以来か、確かまだじじいが生きていた時だっただろうか？

じじいが死んだ時は親族というものが一切来なかった。つまり天涯孤独の時、寂しさを紛らわす為に孤児院なんかを開いたのだろう。

確かについ最近までその気持ちは理解できるようになった。確かに一人は寂しかった。誰かが回りにいるという状況はなんとも安心感を与えられるものだ。

「じじい」

ふと今頃になって、じじいが何者なのかを考えるようになった。なぜここに来ることになったキツカケの本を持っていたのだろうか。死んでから知らないことばかりがあったことに気付き、少し悔しくなった。

「くそっ」

短い言葉をつぶやいて、無理やりその思考を停止するように俺は深い眠りにつくことにした。

「……………」

何時間立っただろう。ふと目を開け、窓の外を見てみる。  
現代の都会には当たり前前の街灯もなく、闇の中に月の光だけが辺りを静かに照らしている。

「……田舎に泊まったみたいだな」

さてもう一度眠りにつこうと思った先　外から「ヒュー」という  
何かが近づく音が聞こえた。

「ガシャーッン！」

さっきまで見ていた窓は無残にも粉々に割れている。そして、床にはその原因かと思われる矢が刺さっていた。

「な、なんだ!？」

俺はすぐに飛び起きて、窓の外を隠れながら見た。

「あ、あれは!？」

遠くから、いつの間にか近づいてきた武装した人間の軍勢。  
そして、剣と斧が交差クロスしている旗を確認した。

「なんなんだよ、あいつらは!」

俺は銃を腰に入れ、魔王の部屋と向かった。



## 5話 自室（後書き）

『紛らわしい』なのに『まぎわらしい』と表現する人が検索したら多かつた件。

日本語って難しいよねえ、『ふいんき』とか。

## 6 話 罫

「……………うほ……………いい魔王って」

部屋から出ると、すぐ扉の横でジゼルがボソボソとしゃべって何かのメモを書いている。

「何してんだ、ジゼル？」

俺はジゼルに話しかけると「ヒュイツ!?」と鳴き声のような声で驚いた。

「こ、コウヤ? 今の聞いてました？」

聞いていた? 俺が聞いた限りでは「いい魔王」ぐらいしか聞こえなかったが……………。

魔王がどうしたんだろうか。

「あ、分かりました。そこまでなら大丈夫です」

どうやらジゼルは俺の心を読んで、何か大丈夫だと分かっただらしい。そして、そのまま持っていたメモを後ろにサツと隠す。

何か場の空気が違ってしまっただが、今はそれどころじゃない。

「こんなことをしている場合じゃない。すぐそこに人間たちの軍隊みたいなのがやってきている」

俺はそのことをジゼルに言うと、ジゼルは血相を変えて俺の肩を掴む。

「旗は！？ 旗はありましたか！？」

「は、旗？」そういえば剣と斧が交差した旗を見たような気がする。そのことを考えると、ジゼルの顔色が青くなり、ブルブルと震え始めた。

「そんな……バトルマスターが来るなんて」

『バトルマスター』

その名からすれば戦闘のプロといったところか。ジゼルの怯えようから見るからに相当恐ろしい相手だとは思っが。

「とりあえずジゼル。このことを早くバゼルに」

ジゼルは自分の応答に答えなかったが、俺は無理やり手を引いて魔王の部屋と連れていくことにした。

「バゼル！」

ノックもせず魔王の部屋に入ると、バゼルは人形のアンジェリカちゃんを抱いたまま眠っていた。

「……本当にこいつ魔王なのか？」

ジゼルにそう問いかけると「いちおう……」と答えが返って来た。

「そんなことより、お父様、起きてください！」

ジゼルはバゼルの体を揺らしバゼルを起こす。

「……なんだ？」

バゼルはいかにも魔王のような口調で目覚めの一言を言ったが、その横に抱いているアンジェリカちゃんを見ると台無しになってくる。「お父様大変です。バトルマスターが！」

バゼルはむくりと起き上がり、ベッドに座り治した。

「バトルマスターか……ついに英雄の一人が動き出したようだな」

窓から見た人間たちの数だけでも、ゆうにここの魔物数よりかは多かった。

しかも、その魔物大軍を一人で壊滅へと追いやった英雄とやらが来るのであれば、ここも持たないだろう。

『逃げるか？』

そんな言葉が脳裏に浮かんだ。異世界から来た俺にとって、この戦いは無関係だ。しかも、それで命を落としたのなら冗談じゃない。「……………」

ハッとジゼルがこちらを無言で見ているのが分かった。しまった、こいつは心を読めたのだ、俺の先程の考えも見てしまったのだろう。少し俺は気まずそうにしていると、見かねてバゼルが手招きをした。

「お前はジゼルを連れて、一旦この城から逃げろ」

願ってもない申し出だった。俺だけ逃げるのは気が引けたが、ジゼルの連れてなら、それは別だ。

しかし、もちろんジゼルはそのことを猛反対した。

「嫌です、お父様。ここから出て行く場所なんてありません！」

魔王はフーっとため息を付いて立ち上がり、立掛けておいたマント

を羽織った。

「大丈夫だ、ジゼル。負けるつもりはない。ただ英雄相手となればお前を守りながら戦うのが難しいだけだ」

ジゼルはバゼルをじーっと見て少し黙っていたが、納得したのか俺の手を引いて部屋から出た。

ジゼルの性格からしてみれば、あそこで諦めたのはどうも不思議でならなかった。知りたかったが、なかなか言い出せず、先に歩いたジゼルのあとに付いて行こうとするとクルリとこちらを向く。

「本当にそう考えていたからです」

どうやらバゼルの心の声を読んで、それだけの自信があるというところで納得したのだろう。

けど魔王のことだ……本当にそう考えていたのだろうか？

「行きましようコウヤ」

俺はジゼルに案内されるがまま廊下を走っていった。

しばらく歩いていくと、メガフォンのような物体を持ち歩いているインプに出くわした。

「緊急警報発令、緊急警報発令。各自戦闘準備をし、配置に付け」

どうやら伝令係なのだろう。インプはパタパタと羽を動かしながら、俺らに見向きもせずメガフォンで叫んでいる。すぐに急いで長い廊下を走っていくと、所々の部屋に魔物たちは武器を取り、防具を

着たりと戦闘の準備をしていた。魔物たちは殺気立っていつて空気が荒くなっている。

少しその様子に興味が出て、しばらく見てみると無理やりジゼルに手を引かれた。

「行きましようコウヤ。みんな良い人達ですが、人間の区別ができない者もいますから」

つまり人間である俺もその標的ということだろう。黙って、その場から離れようすると大きな揺れが俺達を襲った。

「きゃっ」とジゼルの足元がふらついたので、すぐに肩を支える。

「あ、ありがとうコウヤ。でも一体何が」

急いで、それを確かめようとすぐその廊下にある窓から外を見る。暗闇の中で、ポツポツと炎が燃え上がっている。それに照らされて城の回りに何千という兵士によって囲まれていた。

「扉を開けようとしているぞ！」

伝令係のインプが部屋にいた魔物たちに叫んだ。そして、武装した魔物たちはドシドシと列をなして入り口の方へと走っていく。邪魔にならないよう廊下の隅に2人して立ち尽くしているとその中の一人がジゼルに気付いたのか、牛の顔をした大きな巨体な魔物がこちらに近づいてきた。

「姫、私が秘密の抜け道まで案内します。そこ人間もついでに」

黒い剣を持った牛は自分について来いと話した。少々俺は気が引けたがジゼルが「大丈夫です」と安心させるように言った。

「彼の名はブルック。ミノタウロス族の剣の使い手です。彼がこの城に小さい時に来た頃、面倒を見ていたんですよ」

「小さい時から面倒……?」このブルックという魔物。見た感じでは相当な年齢っぽく見えるが、小さい時からということはジゼルは一体何歳……。

「随分、失礼なこと考えていますけど私はあなたの歳とそんなに変わりありませんからね。魔物が成人化するのは10年と早いです」その答えで納得した。ブルックは「ハハッ」と笑うと、廊下の突き当たりまでたどり着いた。

「おい、行き止まりじゃないか」

ブルックに問いかけると、黙って壁に付いているキャンドルを持ち横に倒す。

そして、そのままキャンドルを引っ張るとドアのように隠された扉が開いた。

「映画みたいだな……」

つぶやくと「エイガ?」とジゼルに疑問を持たれた。やはりというか、こちらの世界には映画なんて代物はないようだ。まあ世界がまさにファンタジーだから無理もないだろう。

ブルックは扉の裏側に設置されていた火が灯ってない松明にキャンドルから火を付け俺に手渡した。

「姫、行って下さい。奥に馬車があります」

隠し扉の奥を見ると暗く狭い通路だった。この巨体のブルックにその隙間が入れるのだろうかと心配したが、ブルックは進もうとしない。

「人間」

ブルックに声をかけられると、横に差していた剣と鞘をこちらに投げ渡した。

「人間にこんなことを頼むのは心苦しいが、私はここに残り全力で戦う。それまで姫の安全を頼む」

いざという時はこれで戦えということだろう。あいにく、剣というものには縁が無い。鉄パイプを喧嘩の時に振るったことはあったけど。俺はブルックにコクンとうなづき、ジゼルの手を引こうとしたが、一向に足を動かさず気配はなかった。

「ブルック……死ぬ気？」

ジゼルはブルックを見つめて問いかける。俺にもブルックの眼を見て、そのことは心が読めなくても分かった。決心をしたような眼をしていたからだ。

「私たちミノタウロス族は誇りを持って死ぬことが生き様です。死に様が大切な人を守る為というのなら、それは私の本望なのです」

ジゼルはそのままブルックに近づくとパシンと牛の顔を叩いた。

「私の為と思うなら生きてください。そんな為に今まで面倒を見たわけではありません」

ブルックは黙って、そのまま隠し扉を閉めていく。ピシヤリと閉まるとあたりは松明の明かりだけで静かな空間になっていた。ジゼルの手を引き、狭い通路を先導する。

しかし、奥に馬車がいるといったが、この先は一体どこへと進んでいるのだろうか。さすがに裏口までも敵は気付いているのではないのだろうか。

「それは大丈夫です、コウヤ。ほら、もう見えてきました」

ジゼルが指差した先はどうみても行き止まりのようだが……いや、下に穴が空いている。

この穴には記憶がある。確かこの城に来た時使った「魔法の穴」というものだ。

「ここから進めば、すぐにベルーザの街の近くに出ます」

確かにこれなら囲まれていたとしても問題はないわけか。まったく魔法というものは便利なものだ。

2人で魔法の穴に飛び込むと、あっという間に視界には緑が広がっていた。

「確かここらに馬車があったと……」

あたりを見回すが、それらしきものは見当たらない。まさか、あの牛め、嘘つきやったのだろうか。

「コウヤ……」

急にジゼルが息を呑むようにこちらに話しかけてきた。

「どうやら罠にはめられたようです……」

「それ、どういう意味……」

その話を遮られるかのように俺の足元にはあと数センチで当たるかと思われる矢が突き刺さった。

「魔族め、抵抗しなければ命を取りはしない」

剣や弓矢を構えた兵士たちがこちらを回り囲まれてしまった。

「……………」

どうやらはじめから俺たちがここから来るのを知られていたみたいだ。だが、なぜこいつらは俺たちのことを知っている？ 何はともあれこの状況をどうにかして抜け出さなければならぬ。

敵の数は6人の内、前3人が弓矢を構え、後ろには剣を構えていた。確か漫画なんかでこの戦法は見た気がする。ジゼルにその漫画の内容を心の声を読ませるように伝えようと、こちらを見て頷いた。

どうやら分かってくれたようだ。俺はゆっくりと先ほどもらった剣に手をかける。

「貴様！ 剣から手を離せ！」

弓矢を持った前の男がこちらに叫んだ。それでも俺は聞き入れず、剣を引き抜いた。

「構わん！ 放て！」

兵士たちが弓矢を放った瞬間を見逃さなかった。俺は即座に矢が弓から離れた瞬間『伏せる！』と心で思い、その場に身を伏せた。ジゼルも同じようにそこで伏せる。

「ぐわああああ！」

後ろの剣を持った男3人が矢が当たり、その場に倒れていった。

弓矢を持った男がしどろもどろしている瞬間、俺は即座に立ち上がり、前にいた一人を剣で切りつける。

「ぎゃああああ！」

すぐ隣にいたもう1人の兵士を剣で刺した。

「ぐええええええ」

最後の1人が弓矢を構え、こちらに放とうとしたので即座に兵士に

刺さった剣を抜き、抜き身のまま投げる。円を描くように投げられた剣は丁度、兵士の頭に突き刺さった。

「すごい……」

ジゼルは呆然と伏せたまま、その光景をまるで芸術的な絵を見たような感想のようにつぶやいた。さすがに俺も喧嘩には慣れていたこともあったが、ここまで華麗にやったことはない。それに簡単にここまで人を殺すことに何のためらいも無くなっていた。よく戦場に行った人が口にする一度人を殺せば馴れるということはこのうことを言うのだろうか。

「うっう……」

どうやら後ろにいた矢を突き刺さった兵士の1人に息があった。俺はその兵士に近寄り、なぜここにいたのかを聞く。

「お前、人間だな……ゲフ」

血を吐きながら、兵士はこちらを睨んだ。

「なるほど、人間に飼いなされた魔物がいるように魔族に飼いなされた人間もいるわけか」

「一体、何のことだ!？」

「知ってどうする!? お前はここで死ぬからな!」

途端に矢が刺さっていた兵士は立ち上がり、こちらに剣を振るうとした。

「アイスアロー!」

剣を持っていた兵士は、どこからともなく現れた鋭く尖った氷の刃

に突き刺さり、そのまま倒れていった。

「……」

先ほど聞こえた言葉や、ジゼルが手を前に出していたように、それはジゼルがやったものなのだろう。

「コウヤ、城に戻りましょう」

どうもジゼルの顔の様子が暗い。

「大丈夫か？」と聞くが、その応答を無視して先ほど来た魔法の穴の方へと歩いていく。

「おい！」

あわててジゼルの手を引くと、振り返ったその顔は涙を流していた。

## 6話 罾（後書き）

長くお待たせしました。怖い話の方書いていたらこっちのがなかなか出せずに。

ちなみに冒頭でジゼルの書いていたメモの内容は……まあご想像に。

そのうち、まとめたメモが出るかも。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0887m/>

---

異世界のBADGUY

2011年5月4日10時27分発行